

## 序 文

本報告書は、一九八六年から一九八九年までにおこなわれた国立歴史民俗博物館の共同研究、「葬墓制と他界観」の成果の一部をまとめたものである。ご覧の通り内容は多岐にわたり、共同研究とはいうもの一義的な概括を許さないほどに主題やトピックが多方面、多分野にわたっている。それだけこの共同研究のテーマが一筋縄ではゆかぬ幅と広がり、当初からもっていたということになる。

したがってここでは、本報告書の編者が当該課題にたいしてどのような個人的な感想をもっているのか、現時点におけるその関心の所在を以下に若干記して、序文にかえたいと思う。

数年前のことだ。暴力団山口組の竹中組長が大阪で暗殺されたという報道が、われわれを驚かせたことがある。ご記憶の方も多いただろうと思う。

そのごの葬儀の経過について私は関心をもったが、新聞や週刊誌は、そのことにならずしも熱心ではなかった。そのなかで『夕刊フジ』（一九八五年二月七日）が、その第一面に葬儀の模様を紹介するつぎのよう

な記事を書いていたのが目をひいた。

犠牲者の骨あげがおこなわれたのは、神戸市内の鴨越（ひよどりごえ）火葬場であったが、そのとき直系の組員たちは竹中組長の焼きあがった遺骨をかわるがわるしゃぶって、報復を誓ったという。

実は、これには因縁話めいた、後日談ならざる前日談があった。

一九八六年十月のことである。大日本正義団の吉田会長が大阪で射殺されたさい、その部下が同じことをやっていた。すなわち会長の遺骨を碎き、その粉末を酒に入れ、一息に飲んで報復を誓ったというのである。やがてかれは、その誓いの通り、山口組の田岡一雄組長（当時）を京都のクラブで狙撃した。だが失敗して、逃亡中に逆に惨殺されてしまった。まさに生命をかけた復讐劇だったのである。

それで私のはしなくも思いだしたのが、北九州の一部にみられる「ホネコブリ」または「ホネカミ」という習慣である。

これは柳田国男の民俗語彙調査報告書にでてくる言葉である。たとえば大分県の宇佐郡などでは、葬式をだす家の加勢に行くことを「骨コブリ」といっている。「コブル」は「噛（かじ）る」の方言だという。

山折哲雄

また、長崎県対馬の佐須村では、それを「ホネカブリ」といって、作業を休んで手伝うことをいう。さらに、葬式の意味にも使っている。同じ長崎県の五島では、葬式の日に喪家でご馳走になることを「ホネカミ(骨咬み)」または「ホネヲシャブル」といっている。

みてきたように、ここでいう「ホネコブリ」は、あくまでも葬式にかかわることを意味しているのであって、かならずしも死者の骨をしゃぶる行為そのものをいっているのではない。だから、その両者のあいだには直接の関係はないようにみえる。

しかしながら私は、これは一時代以前の段階では、実際に死んだ人の家に行つて、その人の骨をかんで哀悼、追悼の意をあらわしたことの名残りではないかと思つている。骨をかむという行為は、たんにその人の無念の思いを晴らすためばかりではなかった。それよりもむしろ、その死んだ人と自分との関係を確かめ合い慰め合う行為ではなかったかと思う。

そう考えていろいろ資料をあたってみると、しだいに骨かみの慣習が九州地方から関西にかけてひろく分布していたらしいことがわかつてきた。

たとえば大阪出身のある作家が書いた文章のなかでは、若いころ、両親の遺骨の一部を袋のなかに入れてもつて歩き、落ちこんだようなとき、苦しいようなとき、それをそつと出して眺めては、自分の心を慰めていたという。

場合によっては、それをなめたり噛んだりしたこともある。あまりな

めすぎて骨片が小さくなっていくので、それ以後は眺めるだけにした、といったようなことも書かれていた。そしてその気になって探しだすと、そのような事例が一、二にとどまらないのである。そのうえ、そのホネカミの慣習が、北九州・関西圏だけではなく、数はすくないにしても関東・東北圏にも分布していたことがわかってきた。それはひょっとすると、日本列島の全域に及んでいたのかもしれないのである。

そこで考えるのであるが、死者の遺骨を噛むという行為は、むしろ死者と生きのこつた者とのあいだの特別の結びつきを確かめ合うということだったのでないか。そういう意識がある時代までかなり一般化してきて、それがだんだん変化していったと想像されるのである。

文化の変容、社会の発展などにもなつて、骨噛みそれ自体の慣習はすたれていったけれども、しかし言葉自体はそのままのこつたということになるだろう。そこであえていうならば、ヤクザ社会にのこつている骨噛みの作法なども、そして一般の民俗社会に変容した形でおこなわれている「ホネコブリ」も、ある時代までさかのぼると、同じレベルでおこなわれていた慣習だったかもしれないのである。

周知のように日本人は古くから、死んだ人の骨にたいして特殊な感情を抱いてきた。そういう日本人の遺骨崇拜の歴史を考えた場合、いまにのこる「ホネコブリ」の慣習や作法のなかには意外な事実が隠されていることに気づかされるのである。

一九七九年のことだが、『昭和万葉集』という企てが実つて、全二〇

巻の陣容で出版された。昭和という時代は、たしかに現代の『万葉集』を編むのにふさわしい激動の時代であった。

その二〇巻のシリーズのうち、巻一と巻三をのぞく残りの全巻に、戦死者を迎える歌をひとまとめにするコーナーがある。「満州事変」がはじまった一九三一年から戦後の一九七五年ごろまでのほぼ全期間にわたっているのであるが、さしずめこれは昭和の挽歌という部類に入るのだから。

それら一群の歌はひとまとめにくられ、「遺骨を迎える」「英霊還る」などのタイトルを付されている。「還らぬ人」というのもある。この場合とくに注意したのは、「英霊還る」の英霊も実は遺骨を指しているということだ。遺骨が発見されなかったときは、骨のかわりに小石が箱に収められていた。

戦死者の遺骨を「英霊」と称し、それを社会的に追悼する行事が定着しはじめるのは、日中戦争の開始と同時であった。この戦時的な慣習は第二次大戦までつづいたが、敗戦とともに新たな展開をみせることになった。すなわち遺骨収集の事業がそれである。

太平洋戦争における海外の戦没者は約二四〇万人といわれるが、それらの戦没者の遺骨の大部分は、復員引揚げのさいにもち帰られたものをのぞいて、旧戦域にのこされたままであった。

さきの『昭和万葉集』でいえば、右の遺骨収集についての遺族の歌のりははじめるのがその巻一一（一九五五〜五六年）からであり、ソ連への墓参の歌が収められるのが巻一三（一九六〇〜六三年）からである。

戦没者の遺骨または遺骨の埋葬地にたいするこのような執拗で熱い関心は、「十五年戦争」と敗戦後の時代を通じて絶えることなく保持されたのである。

いったい、この「骨」にたいする執着は何に起因するのか。そしてそもそもそれは、いつからはじまったのか。

『昭和万葉集』というのであれば、まずもって本家本元の『万葉集』そのものにあたってみるのが順序というものである。ところがまことに不思議なことに、その『万葉集』の挽歌には死者の遺骨にたいする尊重や崇拜の観念がまったく欠如しているのである。『万葉集』の挽歌が唯一問題にしているのは死者の靈魂の行方であって、あとにのこされた遺骨などではないからである。

どうしてそういうことになったのか。『万葉集』と『昭和万葉集』のあいだにみられる、骨にかんずるこの落差をどう解したらよいのだろうか。端的に言って、縄文・弥生・古墳の各時期に発掘された遺物を通してみるかぎり、遺骨を尊重する観念の痕跡を見出すことはほとんどできない。奈良から平安におよぶ時期の文献をみても、それを傍証するものが見当らない。もっとも仏舍利（釈迦の遺骨）とそれを収める蔵骨器の遺品はのこされているが、しかしそれは特殊な例であって一般の遺骨信仰ととくに結びつけられるものではなかった。

そうした歴史の流れのなかにあって、きわ立った変化があらわれるのが十一世紀である。まず藤原道長などをはじめとする貴族のあいだで、遺骨を保存して祀る風がおこるようになったからである。そしてそれと

呼応するように、高野山に火葬骨の一部を納める風がしだいに一般化するようになった。貴族層における遺骨尊重と高野山への納骨慣習の浸透という変化が、ほぼ十一、二世紀を境にして定着していったのである。

その変化の背景には、むろん仏教式火葬の受容という要因が横たわっていた。火葬はすでに上層階級を中心に奈良時代からおこなわれていたが、しかしそれはかならずしも遺骨尊重の観念と直接には結びつかなかったのである。それでは、この十一、二世紀という時期にとくに遺骨信仰が高揚したのはどうしてか。それについて私は三つぐらいの要因をあげることができるのではないかと思っている。

第一は、浄土教の一般的な浸透という要因である。浄土教は周知のように人間の死後の運命についてもっとも深い内省を加えた仏教の一派である。

第二は、死者の霊は山にのぼる、という仏教以前からの山岳信仰の要因である。さきにふれた『万葉集』の挽歌の多くも、明らかにそのような信仰を反映している。

そして第三が、高野聖たちの積極的な宗教活動であった。かれらは高野山に集まる下級の宗教者であったが、全国に遊行勧進して高野山への納骨をすすめた。高野の山中こそ浄土であり、そこに遺骨を納めることで成仏できると説いたのである。

以後この高野山納骨の風が各地に受け入れられ、近世にいたってこんどは寺の墓地への納骨がそれにとって代るようになったのである。

つい二年前のこと、元駐日大使のライシャワー氏が亡くなったとき、その遺灰がアメリカの西海岸にまかれて話題を呼んだ。太平洋への散骨によって日米のかけ橋になろうという遺志があったことも伝えられた。氏はおそらく自分の骨を自然の海に返すことで墓をつくることを拒否したのである。

この報道はやがて、現代日本人の一部につよい反響をひきおこすことになった。なぜなら葬送の自由をすすめる会がそのことを契機に設立され、それがまた多くの共感・共鳴を呼ぶようになったからである。

このところ大都市を中心に、墓地の取得がますます困難になってきた。人口の集中・土地の高騰といった状況が進行していたからである。一方、過疎化した地方では、寺に付属する墓の無縁仏化が目立つようにもなった。墓と骨の関係者が都会にかけたまま、もどってこなくなっただけである。それだけではない。夫や夫の家の墓に入りがらない妻たちが増えはじめた。女たちだけの志縁墓をつくる運動にまで火がついた。

死んだ人間の骨を祀る観念がゆらぎはじめ、それを管理する方法が多様化のきざしをみせるようになったのである。ちょうどそのような時期に、ライシャワー氏の散骨葬送のニュースが流れたということになるだろう。

しかし考えてみれば、知名人の散骨ニュースは何もライシャワー氏の場合がはじめてではなかった。インドのマハトマ・ガンディーやネルー首相の場合もその骨灰はガンジス川にまかれ、上空から大地に散布され

た。そしておそらくその風にならったのであろう。中国の周恩来首相も死後その骨灰が中国大陸に散布されている。しかしながら当時、この散骨の慣習はただニュースとして伝えられただけで、かならずしも社会的な話題にはならなかったのである。それがここへきて、明らかに変化のきざしをみせはじめている。

インドのことでいえば、この国のヒンドゥー教徒はもとも骨灰は川に流して遺骨への執着を示さない。それにかわってガンジス川への崇拜感情が強烈で、骨灰をこの川に浸すと魂はかならず昇天すると信じて墓は一切つくらない。骨を祭祀の対象にしない無墓文化を生み出したといつてよいだろう。ガンディーやネルーの遺体が散骨によって葬られたのも、その自然な帰結だったわけである。

これにたいしてライシャワー氏のアメリカでは、エンバミングなる葬法が知られている。エンバミングというのは遺体に防腐処置をほどこすことである。すなわち一時的にミイラ化することであるが、実際には屍体にたいする死化粧といった方がよい。朝鮮戦争のころのことであるが、戦死した米兵の遺体が九州に運ばれてきた。寸断され損傷した遺体を、そこできれいに縫合接着し、生前の面影を蘇らせるかのように化粧をした。そして棺に入れ、飛行機でアメリカ本土に送って遺族に対面させたのである。そのような、いわば復元された遺体との対面をアメリカ人は感覚のうえで重視しているのである。それはむしろ戦死者の場合にかぎらず、一般に遺体というものにとたいするアメリカ人の感情をあらわしている。

つまりかれらは、遺体の肉体的側面に重大な関心を示すのであって、日本人におけるような遺体の骨灰的側面にはほとんど無関心である。またインド人におけるような霊魂的側面にも全くネガティブな反応しか示さない。

ところがさきのライシャワー氏は、アメリカ人の一般的な慣習となっているエンバミング方式によって死へ旅立つことを拒否したのである。形式的にはむしろインド方式を採用したということになるかもしれない。もっともそのアメリカでも、スレイトン元宇宙飛行士たちが計画した「宇宙埋葬」という奇抜なアイデアがあった。すなわち人間の遺灰を宇宙衛星につみ、ドカーンと地上三四〇〇キロの軌道にのせて、永久に地球の周りを回らせるといふものであった。その計画がその後どうなったのか確かめてはいないが、もしもそれが実用化されることになると、骨の永久保存という点で骨管理の日本方式に似たものになるのであろうか。エンバミングのアメリカでも、時代の変化につれて遺体の処理に多様な考えがははじめているということだ。「肉」と「骨」の相関についてまずこしずつ変動を重ねていくことになるのだろう。

とすれば、日本の現在はどうか。さきにものべたことだが、日本人の遺骨信仰には長い確固とした伝統があったことは否定しえない。しかしながらこの伝統も、散骨への関心の深まりにつれてしだいにゆらいでいくのではないだろうか。現在の法律がどうであれ、死んだのちその骨灰を野や山や海にまいてもらいたいとひそかに思っている人間は意外に多いと、私は思っているのである。

最後になったけれども、本報告書のために論文を寄稿された研究会メンバーの方々に、心からお礼を申しあげる。この研究成果が、今後の「葬墓制と他界観」というテーマを考えるうえでかならずや重要な一里塚になるであろうことを信じて、筆を擱く。

一九九二年一月一日